

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	岐 阜 県
-------	-------

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	関市立 小金田中学校			フロンティアチャー	古 田 齊	
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	3	1	12	24
生徒数	126	128	116	4	374	

研究の概要

1. 研究主題

自ら求め、切り拓く生徒の育成 ~個に応じた指導を中心として~

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年生・英語 生徒の理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため。 ・ 3年生・数学 生徒の理解の状況に差がある実態を考慮し、それに応じた指導に取り組むため。 ・ 3年生・国語 当該教科に関する研究の実績があること、そしてそれをさらに充実 させるため。
--

(2) 年次ごとの計画

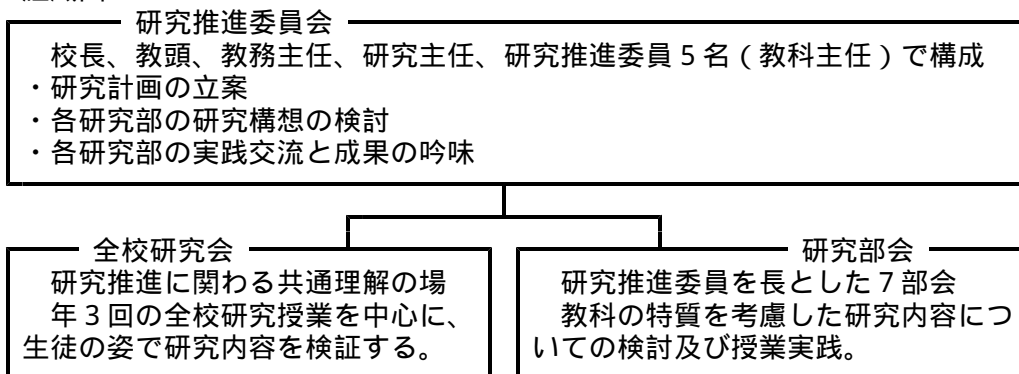
平成15年度	<p>テーマ 自ら求め、切り拓く生徒の育成 ~個に応じた指導を中心として~ 本年度は、研究の方向や構想をより具体的にしていくことが重点となる。「小金田中学校らしさ」を模索するとともに、先進校の実践から学んだり、研究会を通して指導していただいたりする中で、学力向上フロンティア事業の意義を理解し、研究推進のあり方を確立していく。</p> <p>研究の見通し 生徒の主体的な学習の成立をめざして、つきたい力を明確にし、それに照らし合わせた生徒の実態を的確に把握し、個に応じた指導を位置付けた指導計画や学習過程を工夫していけば、生徒は確かな学力を身につけ、主体的な学びを発展させていくと考えた。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>1 個に応じた指導を位置付けた指導計画の作成</p> <p>(1) 評価規準の明確化 評価規準を明確にし、単元指導計画に位置付ける。そして、目指す生徒像をより具体化して単元を構成していく。</p> <p>(2) 発展的・補足的な学習の場の位置付け 発展的・補足的な学習の場の必然性を大切にし、それを位置付けた単元構成を工夫する。</p> <p>2 個に応じた指導の工夫</p> <p>(1) 授業評価を生かした授業改善(指導と評価の一体化) 生徒の実態を効率的かつ的確に把握し、学習活動の展開に生かす具体的方途を探る。また、形成的評価を位置付けた学習活動の工夫し、より個に応じた指導・援助を目指す。</p> <p>(2) 個の学習状況に応じる学習形態の工夫</p>
--------	--

学習集団の編成の在り方や望ましい編成の進め方を具体的にする。

平成 16 年度	<p>テーマ 自ら求め、切り拓く生徒の育成 ~個に応じた指導を中心として~ 平成16年度は、研究の方向や構想にそって具体的な実践を積み上げていくことが重点となる。その中で、より個に応じたきめ細かな指導のあり方を具現化していく。このような取り組みが、自ら主体的な学びを展開していく生徒を育てていくことにつながり、成果として、生徒の姿で明らかにしていくことが大切である。</p> <p>研究の見通し 研究の仮説は、15年度と同様である。 個に応じた指導を位置付けた指導計画や学習過程の工夫が、どのように生徒の主体的な学習につながっていったかを検証していく。設定した「つきたい力」は的確であったか、その力を育てていく過程は、適当であったか等、具体的な姿で明らかにしていく。</p> <p>研究の内容・方法 1 個に応じた指導を位置付けた指導計画の作成 (1) 評価規準の明確化 評価規準を位置付けた単元指導計画を作成していくとともに、これまでの単元指導計画を見直し、改善を図る。 (2) 発展的・補足的な学習の場の位置付け 発展的・補足的な学習の場の必然性を見直す。生徒のそれまでの学習状況を含めた実態から、それらをどのように位置付けることがより効果的かを検証する。 2 個に応じた指導の工夫 (1) 授業評価を生かした授業改善(指導と評価の一体化) 生徒の実態を効率的かつ的確に把握し、学習活動の展開に生かす具体的方途を探る。また、形成的評価を位置付けた学習活動の工夫し、より個に応じた指導・援助を目指す。 また、学力診断テスト等の結果をどのように授業改善につなげていくかを明らかにする。 (2) 個の学習状況に応じる学習形態の工夫 学習集団の編成の在り方や望ましい編成の進め方を具体的にしていく。特に、その学習形態の必然性を見直していく。</p>
----------------	--

(3) 研究推進体制

組織図



* 全校体制で研究を推進するために、7部会を設け、そこに全教科の研究が位置付くようにした。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 研究内容1 - (1) <評価規準の明確化>

全教科において、評価規準を明確にした授業を目指した。そこで、単元でつきたい力を明確にし、それを具現化していくための各単位時間の評価規準をより具体的にし、指導計画に位置付けた授業を展開した。

このことによって全職員が、評価規準をどのように設定していくのかを実践を通して具体的に考えることができた。

また、ねらい - 課題 - 評価規準のつながりを吟味することが個に応じた指導をより確かなものにしていくことが明らかになった。

評価規準の意義を理解するにつれ、評価規準を設定する際、さらなる吟味が必要であることがわかった。

(2) 研究内容1 - (2) <発展的・補足的な学習の場の位置付け>

生徒がもつ見方や考え方、それまでの体験や既習内容、学習状況を踏まえ、発展的・補足的な学習の場を指導計画の中に位置付けた。

単元でつきたい力を支える既習内容については、単元の前半の学習内容に補足的な内容を加えたり、単元で学習したことをより確かなものにしていくために、単元の終盤で発展的な内容と補足的な内容を組み合わせた学習の場を位置付けたりすることが効果的であることがわかってきた。

ただし、その必然性を十分吟味した上で位置付けることが大切であり、これからの課題でもある。

(3) 研究内容2 - (1) <授業評価を生かした授業改善>

国語科 第1学年「暮らしを見つめる」の実践から

本時は「話し合いの観点に注意してディスカッションをしよう」という課題で学習が展開された。

生徒にとってディスカッションの学習は本時が初めてであった。そこで、本時の話し合いが生徒自身で進めていけるように、話し合いのマニュアルを作成した。このマニュアルは、前時までの学習状況をもとに、各グループに応じたものを作成した。ほとんどのグループが、このマニュアルをよりどころとしてディスカッションを進めていった。各グループに応じたマニュアルが生徒同士の相互学習を進める大きな支えとなり、生徒は自分たちで以下の観点にそったディスカッションを進めることができた。

- ・自分の立場を述べる。
- ・根拠を述べる。
- ・誰の発言に対するの発言かを述べる。
- ・話題にそって発言する。

<学力診断テストを生かした授業改善>

授業のみならず、学力診断テストを行い、その結果を分析することによって授業改善の糸口を模索することを試みた。

例えば、理科のテスト結果を次のように分析した。

- ・応用問題になると正答率が低くなる割合が大きい。特に、知識を活用して解いていくような思考力を伴う問題になると正答率が低くなる。
- ・学年が上がるにしたがって正規分布の幅が広がっている。(個人差が広がる)
- ・男子に比べて女子の正答率が低い。特に1分野についてその傾向が強い。

このことから、思考力を高める学習内容において、既習内容の確認や思考の順序性を考慮した学習活動を工夫していく必要があることが明らかになった。また、グループ実験などで、一部の生徒に偏りがちな役割を等しく分担していく配慮や、できるだけ多くの生徒が体験できる教具の工夫などが必要であることが分かった。

(4) 研究内容2 - (2) <個の学習状況に応じる学習形態の工夫>

英語科 第2学年「Yumi Goes Abroad」の実践から

英語科では、この学習状況に応じた学習形態の工夫として少人数指導のあり方について実践を進めてきた。特に、少人数指導の必然性を吟味する中で、単位時間の途中で少人数指導を位置付けることを試みた。

2つの習熟度別の学習コースを設定し、その学習の進め方を具体的に生徒に伝え、

生徒自身にコース選択ができるようにした。

学習後のアンケートでは、92%の生徒が「少人数学習があると良い」と答えていた。

このことから、目指す姿を生徒に具体的に伝えることが大切であり、そのことによって生徒自身の主体的なコース選択がなされ、それぞれのコースの目当てに向かって主体的に取り組む生徒の姿が生まれたといえる。

国語科 第1学年「暮らしを見つめる」の实践から

一斉授業の形態では、グループ学習における学習集団の編成の仕方がポイントになる。本時は、ディスカッションの学習で、テーマの似ている生徒を集めて編成した。そこでは、互いの興味・関心が似ているため、意見交流の活性化につながった。また、自分の立場を明確にする提示カードを活用することによって、それぞれの関わりをより一層強めるものにした。

2. 今後の課題

生徒主体の学習を目指すことで、必然性を大切にしたい授業作りに向かうことができた。さらに、これらの歩みをもう一度見直し、より確かなものにしていくことが大切であると考えている。

* 目指す生徒の姿をより具体的にし共通理解を図る。そして「個に応じた指導」が「自ら学ぶ生徒」につながることを生徒の姿でより具現化していく。

* 評価規準をより明確にすることによって、目指す生徒像がさらに具体的なものとする。そして、それを達成するための具体的な手立てを明らかにしていく。

* 学習前、学習中、学習後など様々な角度で評価を行うことで、さらなる授業改善に取り組む。

* 生徒による授業評価を授業改善の糸口として工夫していく必要がある。

学力把握のための学校としての取組

* 期末テスト

・学習内容がどれだけ定着したかを観点別に評価する。

* 学力診断テスト

・生徒の学力全般を客観的に捉えるため、10月中旬に5教科（国語、社会、数学、理科、英語）の学力テストを行った。

・テスト結果をもとに、観点別の分析を行った。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

* 公表会の開催

日時：平成16年1月20日 場所：小金田中学校

対象：美濃地区学校関係者

目的：本校の实践について、その成果を地区に広めるとともに、来年度に向けての課題を明確にする。

* 研究成果普及のための資料作成

・指導案集及び実践事例集を作成し、公表会において配布する。

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 16年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級

7～9学級 10～12学級

13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導

その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科

外国語 音楽 美術 技術・家庭

保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無